清沢の今日から明日を分析し、見通す力に敬意を払っていたのである。かれの日記を読めば、それがわかる。昭和二十年五月のかれの不測の死は、日本にとってまことに無念なことだった。五十五歳だった。

清沢洌の日記は私に勇気を与えてくれる。

長尾龍一
（日本大学教授）

心の底から震撼させられた本というと、何といっても中学二年の時にふと読んだ太宰治『人間失格』（新潮文庫ほか）である。引揚者でかつ虚弱な弱虫であった私は、終戦直後の山村で叔父たちに育てられる荒々しくとげとげしい人間関係の中で、内面を泥靴で踏みにじられるような思いをした。小学校六年の時東京に移ったが、心の中には幼時体験の深い傷を抱えていた私は、「ひらめ」や「堀木」に象徴される、弱者の内面に全く無理解な「世間」の中で、それに適合できず自滅する主人公の運命に、自分の可能的未来を重ね合わせて慄然とした。それとともに、「ひらめや堀木」が「人間」で、大庭葉蔵が「失格人間」なのか、本当は後者の方が「真の人間」ではないか、という問題を私の心に植え付け、その後の思想的生涯の一つの主題となった。

両親はある程度真面目な仏教徒であったが、何れにせよキリスト教には無縁の環境で育った私が、いわば「教養」のために『福音書』を読んだのも同じ頃であった。「柔和なるもの地を嗣がん」の英語 The meek shall inherit the earth. は、「弱虫の天下となるぞ」と訳すべきではないか、などと考え、こんなとんでもない可能性に賭けて自滅したイエスに共感した。法学教師などになって、外見上「ひらめや堀木」と同一次元で生きてきた私は、太宰やイエスのように自滅しなかったことに、今でも罪の意識を感じている。

高校二年の時にデカルト『方法叙説』（白水Uブックスほか）を読んだ。外界の存在は疑わしく、確実なのは「我」の存在だけだ、というその議論は、私に哲学の根源性を印象づけるとともに、内面の主観のみが真実だという当時の私の心情に訴えるところもあった。しかしデカルトが、「神の善意」なるものを持ち出して外界の実在を再構成したのは非哲学的で、それをもっと哲学的にやってみよう、と考えた。それと並行して、主観から社会的世界を再構成しようとする私の社会哲学の営みも発足し、ホッブズ研究などへと連なっていくことになる。

中嶋嶺雄
（国際教養大学理事長・学長）

＊モーパッサン『水の上』（青柳瑞穂訳、新潮文庫）

＊スタンダール『恋愛論（上・下）』（原亨吉・宇佐見英治訳、角川文庫）

＊ツヴァイク『マゼラン』（関楠生・河原忠彦訳、みすず書房）

多感な高校生のころ、そして浪人生活の一年間に読み耽った本が今でも心の糧になっている。私の郷里の松本深志高校では、当時、英語のほかにドイツ語とフランス語が正課としてあった。そこで私は高校二年生からフランス語を選択し、大学受験もフランス語で行った。大学では中国語を専攻し、やがて中国研究の道を目指すことになったが、あのころはもっぱらフランス文化に憧れ、フランス文学を読み、シャンソンを歌うという生活であった。フランス語の恩師・並木康彦先生の存在の故であったともいえよう。

モーパッサンの『水の上』は、数々の美しい短編小説を残しながらも精神面で苦悩の多かった著者が一人の舟子つきのヨット「ベラミ」を地中海に浮かべて放浪したときの自由な精神の記録としての断章である。並木先生が配られたフランス語のテキストを当時の私が訳したメモによると、こんな文章が残っている。「政治をする人は誰でも、船長が難船を避ける義務をもつのと同様に、戦争を避ける義務がある」。

若き日の私はモーパッサンの文章のいくつかをフランス語で暗誦して、その一語一語に共感したのであった。

スタンダールの長編小説『パルムの僧院』や『赤と黒』を夢中で読んだあとにたどりついたのが、『恋愛論』であった。

当時、いわゆる片想いに悩んでいたからでもあるが、相手を美化する結晶作用によって、ザルツブルグの岩塩の小枝がダイヤモンドに飾られるという「ザルツブルグの小枝」の章には、「ああ、スタンダールのようなこれほど偉大な魂に接し得る自分は幸せだ」という書き込みがある。私の十九歳のときである。

ツヴァイクの『マゼラン』は、フィリピンのマクタン島で非業の最期を遂げた英雄の功績は、目撃証言がなかったら、横取りされていたであろう史実を感動的に描いていて、我が家では家族全員の必読文献になっている。

中島義道
（電気通信大学教授）

小学生のころから「もうじき死んでしまい、その後は永遠の無なのだから、何をしても虚しい」という強迫現象のような思いに囚われていた。これに、近い将来人類も滅亡し、膨張する太陽に地球も呑み込まれ、そうしたら生命の誕生はじめこの地上に起こったすさまじいドラマを記憶する者は何もなくなるのだ、という思いが重なっていった。とすると、どう考えても生きる意味はないのだ。時折、こうした私の「問題」を両親や教師たちをはじめ周囲の大人たちに告白すると、一笑に付された。

そこで私は、人生には子供の私なんかが想像できないほど重要な問題があるんだ、大人になったらこんな「子供っぽい」考えは消えていくに違いない、と思っていた。だが、三十歳を過ぎ、四十歳を過ぎても、私の問題は消えない。それどころか、ますます私の身体の深いところに沈殿し、しばしば手のつけられないほど暴れ回り、私を憔悴させるのだった。幸せなことに、私がそれでも沈没せずに生きてこられたのは、この地上にはきわめて僅かだが私と同じ感受性を持つ魂が棲息していることを知ったからである。二十歳のころ、私はそうした魂が書き記した本に巡り会い、「ああ、自分は正しかったのだ！」と叫び、涙の出るほど嬉しかった。サルトルの『分別ざかり』（人文書院）の主人公マチウの脳髄の中には、恋人に孕ませた子をおろす資金を得るために奔走していながら、絶えず「俺は死ぬ」という言葉がぶんぶん飛び交っている。彼にとって、人生はただただ「無用」なのであり、彼はそれを確認するためだけに生きているのだ。カミュの『太陽の讃歌　カミュの手帖――1』（新潮社）からは、死すべき者という残酷な運命に投げ込まれた青年の真摯な呻き声が聞こえる。そして、「たまたま地上にぼくは生まれた」で始まり、「ぼくは死んで埋葬された」で終わる詩を基調にするクレジオの『愛する大地』（新潮社）は、南仏の太陽に照らされてこの残酷さだけを噛みしめて生きる男の物語である。こうした書物が私の「血となり肉となった」かどうかは疑問であるが、自分の問題を共有できる魂を書物の中に発見できて、私はここまで自滅せずに生き続けてこられたのかもしれない。